

開館45周年記念

蓮月と鉄斎

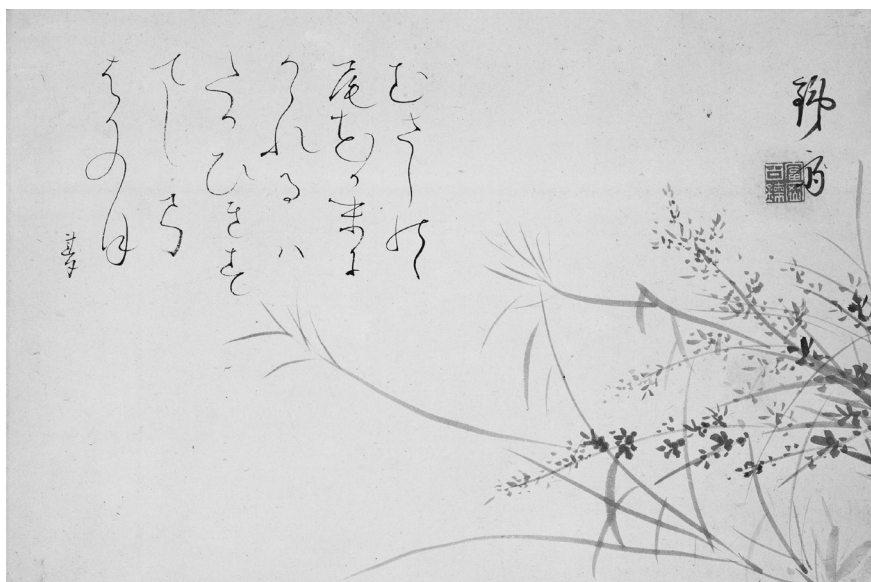
前期 2020年10月11日(日)～11月15日(日)

後期 2020年11月22日(日)～12月22日(火)

会場 鉄斎美術館別館「史料館」

開館時間 9時30分～16時30分

休館日 水曜日・展示替期間 ※入館無料



13 秋草図 大田垣蓮月歌賛



22 小急須 大田垣蓮月作 箱：富岡鉄斎筆

長寿を誇り、数え89歳で没するまで筆を休めることのなかった近代文人画の巨匠・富岡鉄斎(1836～1824)。若き日の鉄斎が人格を形成する上で大きな感化を受けたのが、幕末から明治初めの尼僧・歌人・陶芸家として知られる大田垣蓮月(1791～1875)であった。

大田垣蓮月 蓮月は、寛政3年(1791)に京都三本木で生を受ける。名を誠といい、知恩院の寺侍大田垣伴左衛門光古の養女として育った。鉄斎の筆になる《大田垣蓮月肖像》(No.12)の賛に録された履歴によると、幼い頃より聡明で、和歌と書に優れ、そのかたわら武芸を学んだという。しかし夫と子らに相次いで先立たれたその前半生は不遇であった。文政6年(1823)、二人目の夫と死別後、数え33歳で養父とともに剃髪して蓮月と号し、仏道修業の日々を送ることとなる。この頃より手慰みに作陶をはじめた蓮月は、自詠の和歌を釘彫りした手づくねの茶器などを売ることによって生計を立てた。質素ながら温和な人柄が伝わる素朴な作風は「蓮月焼」と称され、京土産として人気を博した。しだいに蓮月焼を求めて訪ねる者が押しかけるようになり、名利を厭う蓮月は人目を避けるため転居を繰り返し、いつしか「屋越しの蓮月」ともいわれるようになった。

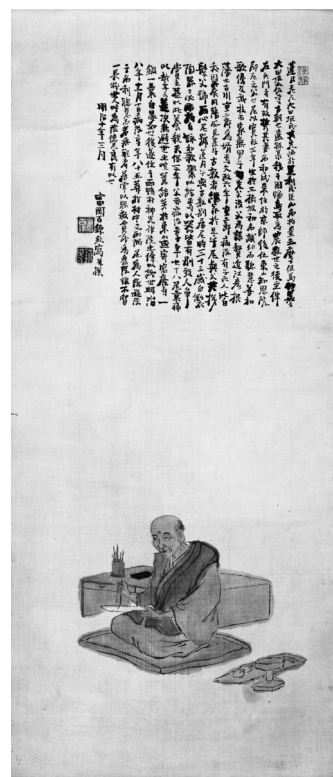
蓮月と若き日の鉄斎 一方、鉄斎は天保7年(1836)、京都衣棚町で法衣商を営む八代十一屋伝兵衛維叙の次男として生まれた。鉄斎が蓮月と出会ったとされる時期は諸説あるが、蓮月65歳、鉄斎20歳頃と推測される。当時、名を猷輔(のち百鍊)といい、学問の道を志す青年であった。聖護院村に別宅を構えていた父維叙は、同村に住んでいた蓮月と知己の間柄であったことから、蓮月より引越しの相談を受け、北白川の心性寺を紹介し、身の回りの手助けをする学僕として鉄斎を同居させた。鉄斎は陶土の運搬のほか、出来上がった急須や茶碗などを栗田の窯元へ運ぶことを担った。

同居期間は維叙が没する安政3年(1856)頃までの約1年間であったが、以後も蓮月は我が子のように鉄斎を慈しみ、深い愛情をもって見守った。勤皇の志をもち国事に奔走した鉄斎は、幕末の乱世に抱く思想をしばしば書簡にしたため、蓮月に宛てている(No.16)。蓮月は、血気に逸る若き鉄斎の情熱を受け止め、時に諭し、宥めた。鉄斎宛の書簡には「何事も御自愛あそばし、御機嫌よく御長寿あそばし、世のため人のためになることを、なるべきやうにして、心しづかに、心長く御いであそばし候やうねがひ上参らせ候」と綴っている。長生きして世のため人のためになることをするように語り掛ける文面からは、鉄斎の行く末を案じる蓮月の情愛が窺える。また、文久元年(1861)頃、鉄斎が長崎へ遊学した際には「もろこしの月のかつらの一本もをりもてかへれわが家づとに」という和歌一首とともに学資を贈り、激励している。鉄斎にとって蓮月はよき理解者であった。

蓮月は自費をもって鴨川に丸太町橋を架けるなど、地域の慈善活動にも努めたことは広く知られているが、その慈悲深く謙遜な人柄に接したことが鉄斎の生涯に多大な影響を与えたことは言うまでもない。鉄斎もまた、日頃より荒廃した神社への寄進や貧困者への寄付を行い、晩年には関東大震災の被災地へ義援金を送った。

蓮月と鉄斎の合作 文久2年、長崎より帰洛した鉄斎は、聖護院村の蓮月旧居に私塾「誠之塾」を開く。この頃、『平安人物誌』(慶応3年版)にも儒家と詩の部に名が掲載され、世に知られるようになってきたが、私塾だけでは収入が安定せず、絵筆をとって生計を立てていたという。すでに歌人として著名であった蓮月は、自作和歌を書いた半切を与え、これに鉄斎が絵を描き合作とすることで収入となるように配慮した。明治2年(1869)、東京行幸に

鉄斎が随行した際、東京神田の宿で揮毫した《花瓶図 大田垣蓮月歌賛》(No.8)もその一つである。蓮月の書した和歌に鉄斎が花瓶の図を配した本作の賛には「蓮月老人、国風数章を書して以て恵まる。是れは其の一なり」とあり、学資や旅費を要するたびに支援していた蓮月の心遣いが伝わってくる。このほか、大津絵に取材した《藤娘図 大田垣蓮月歌賛》(No.2)、《奴図 大田垣蓮月歌賛》(No.6)、大きな笠をかぶった狸が愛らしい《狸図 大田垣蓮月歌賛》(No.3)など、幕末から明治初年にかけて制作された合作が数多く遺っている。



12 大田垣蓮月肖像



20 秋草図煎茶碗・茶碗筒

富岡家と蓮月 有為の者は結婚してはならぬという若狭空印寺瑞芝和尚の教えから、妻帯せずにいた鉄斎に熱心に結婚を勧めたのも蓮月であった。これを受けてか、慶応3年(1867)32歳で画家中島華陽の娘達と結婚するも明治2年に死別。同5年に佐々木ハル(通称春子)と再婚し、生涯連れ添うこととなった。春子との間に一子謙蔵を授かったことを蓮月もたいそう喜び、養母の形見の襦袢を蒲団地にして贈っている。また蓮月は春子にも心を砕いて接した。新婚当初より鉄斎は旅に出、留守にすることが多く、心細くしていた春子を蓮月が励ましていた。それは春子へ宛てた心遣いに満ちた書簡の数々から読みとれる。晩年の春子が和歌と作陶を楽しみとしたのは、かつて蓮月の元をしばしば訪ね、その豊かな感性に触れたことが大きいであろう。



14 桃花図 大田垣蓮月短冊貼交

蓮月追慕 明治8年12月10日京都西賀茂の神光院茶所にて、蓮月は数え85歳で没した。多用の人を煩わすにはおよばないから、誰にも知らせてくれるな、ただ、死んでしまったら富岡にだけ伝えてもらいたいと、生前より周囲に伝えていた。蓮月の遺体は、十数年前に鉄斎が乞われて蓮と月を描いた白い風呂敷に包まれ、神光院西方の小谷墓地に埋葬された。小さな墓石には鉄斎の筆で「大田垣蓮月墓」と刻まれている。

蓮月存命中に蓮月の和歌のみを収録した唯一の歌集『海人の刈藻』は、鉄斎が上梓したものであった。このほか蓮月自筆による上下本の《大田垣蓮月自筆歌集》(No.17)には江馬天江と谷鉄臣が詩文を、鉄斎が絵を寄せている。同じく蓮月自筆の《大田垣蓮月歌集》(No.18)は、跋文に鉄斎の筆で「享年八十五、比帖終為絶筆也」とあり、これが蓮月絶筆の作となったことがわかる。いずれの歌集も、鉄斎は生涯手元に置いていた。

晩年の鉄斎は、蓮月より贈られた蓮月焼に箱をあつらえ、当時を振り返るようにしばしば書画を揮毫した。《秋草図煎茶碗・茶碗筒》(No.20)は、蓮月作の煎茶碗五客に、鉄斎が蓮を描いた茶碗筒が添えられ、箱には鉄斎87歳の筆になる「蓮月幽居図」が描かれている。《小急須》(No.23)、《香炉》(No.24)などの箱にも同様に蓮月幽居図を描くが、のどかな景のなかで穏やかに作陶や詠歌を楽しむ蓮月の姿からは、鉄斎の追慕の念が伝わってくるようである。また、蓮月に関する伝記や大家による称赞を収集していた鉄斎は、それらをしばしば作品や箱に書き写した。《蓮月幽居図四方釜》(No.28)の箱には林鶴梁が著した「烈婦蓮月事」を、蓮月作《磁鉢》(No.26)の箱には梁川星巖、谷鉄臣、江馬天江による漢詩を録し、蓮月を讃えている。



28 蓮月幽居図四方釜

明治33年の鉄斎筆録「所見漫筆」(清荒神清澄寺 鉄斎美術館蔵)に「8月12日、例年の如く西加茂村神光院に蓮月の墓を弔う」と記されていることから、蓮月の墓参を欠かさなかったようだ。そして大正13年(1924)11月10日、同院で蓮月の五十回忌法要を営んだ。常より長寿を願っていた蓮月を89歳にして追悼できたことは、鉄斎にとっても感慨多端であっただろう。それからおよそ一か月半後の12月31日、数え90歳を目前にして鉄斎はその生涯をとじた。

本展では先にふれた作品をはじめ、蓮月が和歌を揮毫し、鉄斎が画を描いた合作《煎茶図 大田垣蓮月歌賛》(No.1)、《秋草図 大田垣蓮月歌賛》(No.13)、蓮月の和歌短冊を貼り交ぜ、晩年の鉄斎が画を寄せた《桃花図 大田垣蓮月短冊貼交》(No.14)などを中心に、蓮月作《徳利》(No.19)、《陶瓢》(No.21)など鉄斎が生涯愛蔵していた蓮月焼を紹介する。蓮月から鉄斎へ受け継がれた深い精神を感じ取っていただきたい。(細里わか奈)

【主な参考文献】

村上素道編『増補 蓮月尼全集』(初版蓮月尼全集頒布会 思文閣出版、2006年)、杉本秀太郎『大田垣蓮月』(京都府立総合図書館、1984年)、小高根太郎『富岡鉄斎』(吉川弘文館、1985年)、柏木知子「鉄斎と蓮月」展出品目録(鉄斎美術館、2010年)、森藤光宣・柏木知子・細里わか奈「鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館聖光文庫共催企画展「富岡鉄斎の妻・春子—歌をよみ、土にあそぶ—」展について—作品・資料の翻刻と解説—」(『鉄斎研究』第74号、鉄斎美術館、2019年)

《出品目録》

[書 画]

番号	名 称	筆 者	制作年	寸 法(縦×横)cm	材質技法	員 数	備 考	
1	煎茶図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応2	1866	129.0×28.7	紙本墨画	1幅	寄託品 逃避行通知状 処世の本義 富岡鉄斎画 江馬天江・谷鉄臣詩書 富岡鉄斎跋
2	藤娘図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応2	1866	121.5×40.8	絹本着色	1幅	
3	狸図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応2	1866	36.3×52.8	紙本淡彩	1幅	
4	松雪図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応3	1867	112.3×29.5	紙本淡彩	1幅	
5	菖蒲図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応3	1867	115.5×30.7	紙本淡彩	1幅	
6	奴図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応3	1867	113.8×47.0	紙本淡彩	1幅	
7	人勝図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	慶応4	1868	106.9×35.9	絹本淡彩	1幅	
8	花瓶図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	明治2	1869	135.5×30.6	紙本墨画	1幅	
9	蓮月・鉄斎合作扇面画帖	大田垣蓮月 富岡鉄斎	明治3	1870	各18.0×51.0	紙本淡彩	1帖	
10	桜花図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	明治4	1871	127.2×39.6	紙本淡彩	1幅	
11	菊花図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	明治8	1875	13.0×37.9	紙本墨画	1本(扇子)	
12	大田垣蓮月肖像	富岡鉄斎	明治10	1877	102.5×43.2	絹本着色	1幅	
13	秋草図 大田垣蓮月歌賛	富岡鉄斎	明治時代		33.0×49.0	紙本着色	1幅	
14	桃花図 大田垣蓮月短冊貼交	富岡鉄斎	大正9	1920	52.0×58.6	紙本淡彩	1幅	
15	大田垣蓮月宛富岡鉄斎書簡	富岡鉄斎	慶応元	1865	14.7×52.3	紙本墨書	1巻	
16	大田垣蓮月宛富岡鉄斎書簡	富岡鉄斎	明治初		15.8×164.4	紙本墨書	1巻	
17	大田垣蓮月自筆歌集 上・下	大田垣蓮月	慶応4	1868	27.4×20.3	紙本墨書	2冊	
18	大田垣蓮月歌集	大田垣蓮月	明治8	1919	17.0×24.4	紙本淡彩	1帖	

[蓮月焼・器玩]

番号	作品名称	制作者	制作年		寸 法(縦×横×高)cm	員数	備 考
19	德利	大田垣蓮月作	江戸末－明治初		経14.7 高16.8	1提	富岡鉄斎箱
20	秋草図煎茶碗・茶碗筒	茶碗：大田垣蓮月作 筒：富岡鉄斎筆	江戸末－明治初		茶碗：各 径5.8 高3.6 筒：径7.9 高12.7	5客 1口	富岡鉄斎箱
21	陶瓢	大田垣蓮月作	明治3	1870	径10.2 高18.6	1提	富岡鉄斎箱
22	急須 松傘摘	大田垣蓮月作	明治8	1875	径8.5 高5.3	1口	富岡鉄斎箱
23	小急須	大田垣蓮月作	明治初		径8.1 高6.5	1口	富岡鉄斎箱
24	香炉 木蓋付	大田垣蓮月作	明治初		径11.2 高9.9	1基	富岡鉄斎箱
25	捏土挿花器	大田垣蓮月作	明治初		口径9.7 長19.0	1口	富岡鉄斎箱
26	磁鉢 塗蓋付	磁鉢：大田垣蓮月作 塗蓋：富岡鉄斎筆	明治初		径19.3 高13.6	1口	富岡鉄斎箱
27	磁壺・盃	大田垣蓮月作	明治初		壺：径6.5 高4.1 盃：口径6.1 高2.8	各1口	富岡鉄斎箱
28	蓮月幽居図四方釜	三代高木治良兵衛作 大田垣蓮月・富岡鉄斎筆	大正9	1920	20.3×22.7×28.4	1口	富岡鉄斎箱

・次回展覧会

「鉄斎の富士」(仮称)

前期：2021年1月5日(火)～2月14日(日)

後期：2021年2月21日(日)～4月11日(日)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://www.kiyoshikojin.or.jp>

令和2年10月2日 印施